JASE

1990年3月号　VOL.8, NO. 3

MONTHLY REPORT SEX EDUCATION TODAY

財団法人
日本性教育協会
THE JAPANESE
ASSOCIATION FOR
SEX EDUCATION

現代性教育研究月報

現代性教育研究月報第8巻第3号（通巻第81号）1990年3月15日発行（毎月1回15日発行）昭和62年12月1日第3種郵便物認可　定価1部100円　年間購読料1，200円（送料とも）発行所㈶日本性教育協会　〒101東京都千代田区神田神保町1－3ミヤタビル内　Tel.03(291)7726　発行人　間宮武　編集人　島崎継雄

もくじ

南米初の世界セクソロジー会議開催…… 1
授業研究／札幌市立幌南小学校…… 4
今月のブックガイド…… 8
連載⑦／性教育用語解説…… 9
日本人はインセストをどう見てきたか……17
現代社会が抱えるインセストの諸問題②……20

〈海外レポート〉第9回世界セクソロジー会議（ベネズエラ）

南米初の世界セクソロジー会議開催

――セクソロジーの国際化に拍車をかけたラテンの熱気――

東京学芸大学教授　波多野義郎

41か国から600人が参加

第9回世界セクソロジー学会(WAS)大会は、昨1989年12月3日から8日まで南米ベネズエラの主都カラカスのヒルトンホテルにおいて開催された。参集したのは41か国からの代表約600人、と事務局が概数を発表した。JASEから宮原忍実行委員（神奈川県立栄養短大教授）と私の2人が参加、発表とともに役員会・総会に出席した。

常春の国での大会には41か国の代表が参集した

1974年にパリで設立第1回大会が開催されてから、モントリオール、ローマ、メキシコ、イエルサレム、ワシントン、ニューデリー、ハイデルベルグと会場が移ってきたが、南米では初の大会である。ベネズエラばかりでなく、いわゆるラテンアメリカ地域の各国から大挙して関係者が出席し、雰囲気を大いに盛り上げた。

ということは、一方ではいわゆるスペイン語圏の勢力が強いという結果を生み、大会行事は公用語と定められた英語よりもスペイン語が優先する

1990-2 1/2

■JASE特別セミナー「インセストと児童虐待を考える」誌上再録／講演

日本人はインセストをどう見てきたか

東京工業大学助教授　橋爪大三郎

橋爪さん

インセスト・タブーと日本の社会

私は、インセストについて、次の三つの課題を中心にお話ししたいと思います。

第一は、インセストと近親相姦は、どんな社会でも必ず忌わしく、避けるべきもの、反社会的な事件と見なされているが、それはなぜだろうか。第二に、民族・文化・宗教の違いによってインセストの避け方に差異があるが、その理由は何か。第三は、日本の社会は欧米社会と比べて、インセストに対する態度にどのような特徴があるか、ということです。

以上の課題へのアプローチとして、幾つかの話題を取りあげてみようと思います。

インセストは、一般になぜ避けられるのでしょうか。

今から40年ほど前に、当時、インセストを避ける理由として諸説あった中で、フランスのレヴィ＝ストロースは、インセスト・タブーは人間が人間である非常に深いところに基づいているのだという学説を、その著書の中で論証しています。

また、歴史をさかのぼれば、精神分析学のフロイトもインセスト・タブーについて、重要な学説を立てました。彼は「インセストはみんなが望んでいるから禁止されるのだ」と主張し、社会に大きなインパクトを与えました。フロイトの学説がヨーロッパ社会になぜ大きな衝撃と影響を与えたのか、それはキリスト教と深い関係があります。

キリスト教には、人間はそもそも罪深いものである――原罪――という考え方がありますが、人々が精神分析によって、この原罪説に縛られることなく、欲望を安心して肯定できることから、やがて高度資本主義社会が開かれていく前提になったのです。

日本人にはフロイトの精神分析は人気がありませんが、ではその日本の社会はどんな特徴があるのでしょうか。

しばしば言われることは、日本の社会の成り立ちが血縁社会ではないということです。日本人も血のつながりを大切にはします。しかし血縁だけに基づいて集団を作る、ということをしないのですね。

ヨーロッパ社会やイスラム社会は、だいたい父系社会で、ユダヤ教やキリスト教もすべてそういう前提に立っています。父なる神、イエスの権威というのも聖書の考え方から出てきたのです。中国や韓国も父系社会で、自分の属する集団が明確であることが特徴ですが、日本人はなぜかそういう社会を作りませんでした。

日本では父親、母親、どちらの集団を辿ってもいい、それは状況次第なのです。従って集団の輪郭も曖昧になります。

インセストに関して言えば、近親相姦を禁止す

るためには、結婚してはいけない人というのを明確に定める必要があるのですが、輪郭が曖昧な日本の集団では、近親相姦の禁止が慣習法にしろ、法律的にはっきり決められたことがありません。

ですからイトコ同士やオジ、メイあたりでも結婚する場合があります。このようにインセストに対する抵抗が非常に少ない社会だと考えられるかと思います。

性モラルも状況依存型

こういう社会にあっては、性的行動をどうやってコントロールするか、性モラルについてお話ししましょう。

性モラルというものは、どのような状況でも、この関係は性的関係であってはならないのだ、というめりはりがルールになっているということです。ところが日本では帰属集団がはっきりしないということもあって、モラルそのものが多分に状況依存的だと言えます。

例えばお伊勢参り。ふだんは勤厳実直な働き者の男が、長年、村にも貢献したので骨休めに仲間とお伊勢参りに行く。お参りの後、精進落しと称して遊郭で女性とねんごろになったりして帰ってくる——非人間的で、本人の人格を疑わせるような行為かというと、そうでもなくて、状況によってはそれは普通のことなのです。

もう一つの例は僧侶の妻帯です。仏教の戒律で僧侶は女性との交渉を禁じていますが、仏教伝来から始まる長い歴史的な経過を経て、やがて明治時代になると、ついに僧侶は全員結婚することになってしまいました。

モラルが状況に依存する度合いが大きいということは、状況によってはインセストも起こり得るということで、宗教的ルールがないということです。

では、日本の神様はどのような神様なのでしょうか。例えば、天照大神は国生みの神様で、人間も穀物もほとんど彼女が生んだわけです。即ち血のつながりがある、ということは甘えられる、ということです。社(やしろ)などにいるので、我われもお祈りをしたり、贈り物をすることもできる、要するに人間関係とそんなに違いがないのです。

日本の神様は人間に何かを押しつけたり、ルールを決めたりしません。性的モラルを作るような神様とはちょっと違うわけです。

一方、キリスト教の神様は、人間と血のつながりがないので甘えることはできません。とても他人行儀な神様ですが、実はそこが大切で、そういう神様を立てておくと、人間関係をコントロールすることができるのです。

性的な行動についても神様は幾つかのルールを決めています。それに違反するのは心理的に非常な抵抗がありますし、社会的な制裁も厳しいものがあります。

このように神様が違うと、家族というものもだいぶ違ってくるのではないかと思われますので、次にヨーロッパの家族との違いを取り上げてみたいと思います。

ヨーロッパ近代社会の家族観には、特にピューリタニズムの影響が強かったと考えられます。ピューリタンは、人間関係はすべて人為的に契約によって決めるものであると強調しました。

人間は、血縁や愛情と無関係に、一人ひとりが神様とつながっており、たまたま神様の配慮によって家族という結びつきを持っているにすぎない。結局、家族は人間個々の人格や権利を尊重しながら運営されていくという考え方です。

そうすると家族の中も市民社会と同じく他人のような感じになり、ノーマルでなくなった場合には犯罪の現場ともなり得るのです。

欧米社会の家族について補足的に申し上げますと、親子関係、夫婦関係というもののイメージは日本のそれとはかなり違っています。

例えば、離婚、非婚（未婚の母）、中絶といった究極の選択を迫られたとき、アメリカ、スウェーデン、日本ではどのような対応を選ぶでしょうか。

アメリカは、夫婦中心の考え方で、愛があれば結婚するが、その愛が冷めれば離婚をためらわない。スウェーデンの場合は、愛は移ろい易いので気軽に結婚せず、同棲という形をとり、未婚の母の増加という現象があらわれます。日本では、最近では離婚も増えてきましたが、中絶ということで調節しようという傾向が見られます。

家族の変遷と性モラル

このように日本の家族は欧米とかなり違っているわけですが、どのような経緯で今日に至っているか、家族の変遷を簡単に追ってみましょう。

江戸時代に儒教思想に基づいた今日の家というものができました。戦いをなくし、家が増えたり減ったりせずに現状を維持するのが平和の根拠ですから、家を守ることは幕府の至上命令です。家が途絶えないように養子を制度化したり、第二、第三夫人さえ許されたのです。

一方、江戸へ単身赴任している武士達が極端な不満にならないように幕府は吉原のような遊郭も作ったのです。いわば、ねじ曲げられた性モラルが制度化していたことになります。しかも男性と女性とでは、性モラルが非常に違うということもはっきり制度化してしまいました。

明治になり、すべての国民が戸主を立て、家長制が敷かれると、財産と共に女性と子供も家長の管理下に入りました。

戦後、二つの大きな変化が起こりました。一つは、家制度が解体して、それまで家族を貫いてきた連続制や伝統、しきたりがなくなり、その結果教育やしつけの目的も喪失し、家庭は消費の場となりました。「消費は美徳」という考え方です。

そしてもう一つは、ヴァン・デ・ベルデの『完全なる結婚』、謝国権の『性生活の知恵』、奈良林祥の『HOW TO SEX』等の著書がベストセラーになり、性は楽しむべきもの、という認識が広く日本人の間に浸透していきました。しかし、誰と誰とが、どういう状況で性関係を持ち、それを享受すればよいのか、という事に関しては積極的なルールを与えなかったのです。誰かに幾つかの制限はありました。そして近親を性的な関係として考えてはいけない、というモラルは今でも生きています。ただし、はなはだ曖昧ではありますが……。

日・米に見る非難の差

さて、アメリカでインセストというと、普通、どのように扱われるのでしょうか。

アメリカで教育の目的というのは、子供におとなとしての行動パターンを身につけさせる、ということです。家族の中でも、子供がおとなになった後のことを考えて、他人同士という側面を入れてつき合っていく。だから母と子の距離は、ある意味で非常に遠くて、甘えるという関係ではないのです。そのような場で、インセストがひき起こされると、子供をおとなとしてとり扱って社会に送り出す、という教育の目的を逸脱した関係を子供に強いている、おとなの暴虐であるということで厳しく非難されます。

日本の場合は、家族における教育の目的というのがたいへん曖昧です。子供が社会に通用するおとなになって出て行くのは確かですが、それは何となく自然にそうなるのであって、親が積極的にそのようにしつけているかどうかは疑問です。

日本人の場合、いちばん大切だとされていることは、相手の欲していることを先回りしてうまく与えてやる、思いやり、のようなことではないでしょうか。

そうなると、子供の欲求と親の欲求が未分化のままもつれ合い、なかなか自立できないという状況も生まれてきます。例えば子供が性的な欲求を持っているのを親が察することから、その終息点にはインセストというケースも考えられます。親自身に、それを歯止めするきちんとしたおとなの目、他人の目、神の目のようなものが欠落しているのではないでしょうか。

また、周囲も子供の欲求を考えてやるということは、愛情の発露であるという受けとり方をして、事情によっては斟酌(しんしゃく)する余地もあるのではないかといったふうに考えてしまう。アメリカと比べてかなり手加減されていると思います。

以上、インセストの周辺と申しますか、インセストに関連のある事実を述べましたが、皆さんの研究に多少とも参考にしていただければ幸いです。